



● オオウバユリ (大姥百合) ユリ科

長尾 キヨ (津軽植物の会)

オオウバユリは北海道と本州中部以北の多雪地に見られ、梵珠山ではごく普通に見られる。高さ1.5m位になる大型の多年草である。

葉は円心形で長さ15~25cm、幅7~15cm長い柄があり茎の下の方にまとまってつく。単子葉としては比較的珍しい網状の葉脈がある。花期は7月下旬から8月でテッポウユリに似た緑白色の花が総状花序に10~20個つき茎の上の方に横向きに半開する。

和名は開花期に基部の葉はたいてい枯れるため「歯(葉)がない」の音に合わせ姥の名をつけたという。

オオウバユリは一つのさく果(熟すと果皮が裂開して種子を散布するもの)に種子を600個ほど実らせる。春、発芽した種子は細長い子葉を持つ芽ばえとなる。翌年から丸みを持ったふつうの葉になり、さらに翌年から心臓型の葉になる。葉の枚数は年を経て個体の成長が進むとともに増えていく。枚数が5~7枚になると翌年開花する。つまり発芽から開花まで最低6

~8年程度はかかることになる。しかし、よほど条件がよくない限り、毎年葉が増えていくとは考えられない。開花までには少なくとも十数年はかかっているはずである。条件によっては数十年をようしている可能性さえある。

オオウバユリは、長年かかって鱗茎にたくわえてきた貯蔵物を開花にすべて使ってしまふ。このため開花後もこの鱗茎はなくなり、個体としては「死ぬ」ことになる。つまり開花は一生に一度きりなのである。しかし多くの場合、花茎の基部に小さな鱗茎が1~数个残されるため、「株」としては生きのびる。

オオウバユリの鱗茎にはデンプンが豊富にたくわえられており、アイヌの人々はこれを重要な食料源としていたという。鱗茎はそのままゆでたり焼いても食べられる。ユリ根に似ておいしいものである。



オオウバユリ (ユリ科)



オオウバユリの果実

Calendar table for 2023 (生物暦(2023年)) showing dates, weather, and biological observations for November and December.

● 「イタドリハムシ」ハムシ科

鳴海 富美子 (津軽昆虫同好会)

ハムシの仲間は種類によって決まった植物の葉を食べることが多い。クルマハムシ(クルマ)、ヨモギハムシ(ヨモギ)、フジハムシ(フジ)等である。イタドリハムシはイタドリを食べる「葉虫」という意味であるが、ここではイタドリより大型で林縁・土手・草地等に群生しているオオイタドリである。茎は山菜となり、また、民間薬としても利用されているようである。

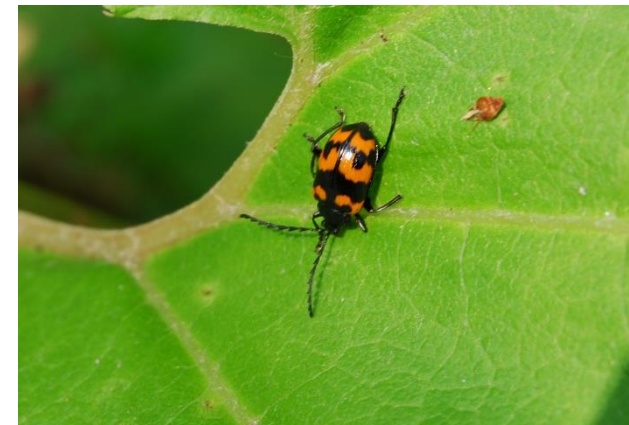
このハムシは黒色で上翅に朱色の鮮やかな斑紋があり、長くてギザギザした立派な触角を持っている。成虫の鮮やかな斑紋は刺激を与えると苦くていやな味のある黄色い液を出して、鳥等の天敵から身を守っているナナホシテントウやナミテントウに擬態していると考えられている。人間には害はない。

梵珠では5月頃から成虫越冬した個体が現れ、次第に葉上にたくさん見られるようになる。7月に入ると大きさが様々な幼虫がたくさん葉裏で見られるようになり、成虫は8月頃まで姿を見ることができるようである。成虫が多いにもかかわらず卵は見つからず、ま

た、幼虫が多いにもかかわらず蛹は見つからない。それは卵と蛹は土中にあるとのことで、あれだけ探しても見つからないのも納得である。成虫が土中に産卵するのは食べられないためであり、幼虫が葉上にいるのは栄養を摂取するためと思われるが、地中と葉上を往復するのはさぞたいへんなことと思う。

幼虫は黄色でたくさんの黒っぽい斑紋があり、小さなものから1cm程の大きさのものまで、大小様々なものが一緒にいるのを見ることができる。成虫・幼虫とも数が多いため、葉は葉脈を残してレース状に食べられていることもある。

今年は昆虫の食欲を満たすような新鮮でみずみずしい葉は少なく、かわいそうな気がした。これも異常気象の影響かと思われる。



イタドリハムシ (梵珠 2012年5月21日)



イタドリハムシ幼虫 (梵珠 2024年7月2日)

Calendar table for 2023 (生物暦(2023年)) showing dates, weather, and biological observations for November and December.